

羽化

神永学

1

ミカとエリが、また私のことを見て笑ってる――。

視線から逃れるように顔を伏せた。けれど、ひそひそと囁き合う声は、どうしたって耳に入ってしまう。

「ってか、ないわ。どうすれば、あそこまで太れるのかね？」

「食べ過ぎでしょ。ニキビ凄いし」

「あれで、名前が美麗みれいってウケる」

そう言って笑い合うミカとエリの声が、私の鼓膜こまくをガリガリと引っ掻く。

好きでこんな容姿に生まれたわけじゃない。

腫れぼったい一重の瞼まぶたも、低くて丸い鼻も、太り易い体質も、顔のニキビだって、運悪く両親の悪いところを受け継いでしまったのだ。

自分では、どうしようもない。

この容姿を醜みにくいと思っっているのは、誰より私自身だ。だから、メガネと髪でできるだけ露出する面積を減らし、終始俯うつむくようにしている。

本当は、他のみんなみたいに、スカートを短くしてみたいけれど、太い足を出したくなくて、膝下丈のままだ。

誰よりも私が一番この容姿を疎うとましいと思っっている。哀しくなっ
て机に突っ伏したところで、シャーペンが床に落ちてしまった。

「落としたよ」

はっと顔を上げると、武英君たけをきが私にシャーペンを差し出していた。色白で、切れ長の二重の目。鼻筋がすつと真っ直ぐ通っっていて、中性的な顔立ちをしている。

私とは同じ人間と思えないほどに顔が小さくて、その顔を見れただけで、一日幸せな気分になるのに、シャーペンを拾ってくれるなんて――。

「あ、ありがとう」

緊張のせいで、声が震えてしまった。

シャーペンを受け取るとき、一瞬だけ、彼の綺麗な指が触れた。

凄く滑らかで、少し冷たかった。

武英君は、表情を変えることなく、斜め前の自分の席に座り、辞書のような厚い本を取り出し、それを読み始めた。

武英君は、陰口を叩くあのミカやエリのように、容姿を鼻にかけたりしない。物静かで、ほとんど口を開かないが、私みたいな不細工にも、平等に接してくれる。

彼の存在は、神々しくもある。

「ちよつと。あいつ、何ニヤニヤしてんの？」

「マジ？ キモいんだけど」

「まさか、武英君狙ってるとか？」

「身の程知らずでしょ。家に鏡ないんじゃない？」

ミカとエリの言葉で、再び怒りがこみ上げてくる。

二人は、毎日、鏡と向き合う度に、私がどんな惨めな気分になっているのか、知らないのだろう。

「美麗。今日、一緒に帰ろう」

声をかけてきたのは、京子だった。

少しぼつちやりしているけれど、私のように太っているのとは違う。ニキビもないし、みんなにはないけれど、可愛いと言われるタイプの女子だ。

京子が、ミカとエリの悪意のある視線を隠すように立っているのは、偶然ではなく、意図したものでしょう。

二人から私を遠ざけようとしているのだ。

「あ、うん」

「やった。じゃあ、またね」

始業のチャイムが鳴ると同時に、京子は手を振りながら自分の席に戻って行った。

彼女の席は、武英君の隣だ。

京子は、私を庇い、かば気遣い、きづか友だちのように振る舞ってくれてくれるけれど、それは私を好きだからではない。

彼女は、誰にでも平等な優しい女の子を、隣にいる武英君にアピールしているだけだ。

京子は自分がかわいいことを分かっているから、私なんかに優しくするフリができる。きっと、私と比べれば、自分のかわいさが目立つとも思っているのだろう。

こんな考えはいけないと分かっているけれど、容姿に自信がないと、どうしても卑屈ひくつになってしまう。

放課後、約束通りに京子と一緒に帰ることになった。

京子と帰るときは、近くの児童公園のベンチに座って、少しだけお喋りをするのがいつものパターンだ。

「あの二人が言うこと、あんまり気にしない方がいいよ」

京子が向けてくる笑顔が、眩まぶし過ぎて辛い。

「う、うん」

「もっと自分に自信持ちなよ。美麗ちゃんは、そのまま可愛いよ」

——嘔吐き。

思わず、声に出しそうになった。

京子は分かっているのだ。可愛くないと自覚している人に、可愛いと言うことが、いかに残酷なのかを——。

「……」

「ダイエットとかして、あの二人を見返してやろうよ」

京子の無自覚な刃が胸を抉る。

今の言葉は、私が太っていて、可愛くないと言っているのと同じだ。

遠回しな分、ミカやエリより質が悪い。

痩せられるものなら、私だって痩せたい。京子やミカ、エリたちみたいに、スカートの丈を短くして、足を出し、男の子たちの視線を集めながら歩きたい。

ニキビが無くなれば、髪だってもっとお洒落にカットする。華やかな化粧をすれば、私でも少しくらいマシになるはずだ。

叶いもしない願望を抱きながらも、それを押し殺して、京子の話に「そうだね」と相槌を打った。

京子と別れたあと、私はずっとスマホを見ながら歩いた。

そうしていれば、顔を見られることもないし、周囲の視線も気にならない。

容姿のことを気にしているせい、私のスマホの検索履歴は、ダイエットと整形で溢れ返っている。

最近、ダイエットに効くというサプリがたくさん出ているし、整形技術も飛躍的に進歩しているという。

だけど、検索するだけで、これまで実行に移したことはない。

勇気が無いからではない。お金が無いからだ。

スーパーのレジ打ちのバイトだけでは、整形費用なんて賄えない。

サプリにしたって、効果や評価が高いものは、どれも高額だ。

パパとママにお願いしたこともあるけれど、「美麗ちゃんは、そのまま可愛い」と、京子と同じことを言われて終わってしまった。

自分たちの遺伝子のせいで、こんなに苦しい思いをしているのだから、責任を持って整形費用を持つべきだと思うのだけど、流石にそこまで言うのは憚られた。

家の近くまで来たところで、スマホの画面に広告が表示された。

「究極のダイエットサプリ登場！ どんな人でも、必ず痩せられる！」

よくある類いのネット広告だ。

すぐに閉じようとしたのだが、宣伝文句の後に並ぶ文字を見て、ふと手が止まった。

△無料体験モニター募集中。但し、弊社基準による検査を受けて頂きます▽

——嘘臭い。

それが、正直な感想だった。

だいたいこの手の無料モニターは、後から高額な費用を請求されるか、効果をアピールするために、痩せやすい人を敢えて選んでいるに違いない。

そう思っていたはずなのに、なぜか応募をクリックしていた——。

2

△^{おおた}太田美麗様 無料モニターキャンペーンに当選しました！▽

そのメールが届いたのは、二日後のことだった。

そこから、^{さとう}佐藤と名乗る担当者と、メールでやり取りをすることになった。

モニターということで、色々データを採る必要があるので、一度、会社まで来て欲しいとのことだった。

直接、顔を合わせることに抵抗があったけれど、無料という言葉に釣られて、学校が休みの土曜日の昼間に行くことになった。

佐藤に指定された会社の研究室は、大学の近くにあった。白い壁の箱のような建物で、看板などは出ていなかった。

本当にここで合っているのか不安になり、何度もスマホで住所を確認していると、「こんにちは」と声をかけられた。

目を向けると、三十代半ばと思われる男性が、エントランスから外に歩み出て来た。

「あ、えっと……」

「太田美麗さんですよ。メールではどうも。佐藤です」

佐藤が、にこっと人懐こい笑みを浮かべた。

痩せすぎなくらい痩せていて肌も白い。白衣を羽織はっおっていて、いかにも研究者といった風貌ふうぼうだった。

「は、はじめまして。太田美麗です」

「どうぞ。中に入ってください」

「あ、はこ」

私は、佐藤に促うながされるままに建物の中に入った。

エントランスに、従業員らしき人の姿もなく、建物が広い分、閑かん

散さんとして見える。

「誰もいないんですか？」

私が訊ねると、佐藤は一旦、足を止めた。

「土曜日は本来は休みなんですよ」

「すみません。休みの日に……」

平日は、学校があるので、土曜日を指定したのは私だ。

佐藤が休日返上で、対応してくれているのだと思うと、何だか申し訳ない気分になる。

「いいえ。気にしないでください。ぼくは、仕事が趣味みたいなものなので。どうぞ、こちらに――」

佐藤は、廊下の奥に私を案内する。

長い廊下を抜け、辿たどり着いたのは、清潔感のある白い部屋だった。壁には、大きなモニターが設置されていて、医療用と思われる機器が整然と並んでいる。部屋の中央には、リクライニングする大型の椅子が設置されていて、私はそこに座るように指示された。

「早速ですが、検査のための採血をさせて頂きます。現在のデータを採るだけなので、ご安心下さい」

佐藤は、そう言うと手際よく私の腕に採血バンドを付け、脱脂綿で消毒をしてから、注射器で採血をした。

佐藤は、改めて私の腕を脱脂綿だっしめんで消毒したあと、しばらく待つよ

うに言って部屋を出て行った。

色々とデータが必要なのは分かるけれど、採血までするとは思わなかった。

でも、そこまでするのだから、効果も大きいかもしれない。

今より、痩せることができたなら、私も短いスカートを穿けるだろうか？ 服のサイズが変わってしまうかもしれない。そうなったら、出費が高^{かさ}むけれど、それはむしろ喜ばしいことだ。

今までは、身体の線が目立たない服ばかり着ていたけれど、自分が着たい服が着れるのだと思うと胸が弾んだ……。

「太田さん」

急に肩を揺さぶられて、私はびくっと身体を震わせた。

佐藤が、私のことを覗き込んでいた。

「は、はい」

「おはようございます」

「え？」

「眠っていらつしやったので」

「私ですか？」

「はい」

そんなことを言われても、全然自覚がなかったので、驚くばかりだ。

「すみません。少し、待たせ過ぎてしまいましたね」

「いえ……」

「採血したデータを元に、美麗さんに適したサプリを配合しました」
そう言いながら、佐藤は赤と白のカプセルを指で摘まんで見せてきた。

「配合……ですか？」

「はい。メールでも申し上げた通り、うちがやっているのは、量販店で売るようなサプリではありません。人間は個人差がありますからね。痩せやすい人もいれば、そうでない人もいます。ですから、その人に合わせたサプリを、その場で配合するのですよ」

「そうなんですね……」

「これは、あなただけのサプリです」

「私だけの……」

特別感があって、嬉しくなった。

まだ、飲んでもいないのに、効果が現れたような、そんな気分にさせてくれる。

「一日一錠、寝る前に服用してください」

「はい」

「それと、少し副作用が出る場合があります」

副作用という言葉に不安が首をもたげる。

「どんな副作用ですか？」

「そんなに構えなくて大丈夫です。若干の発熱じやっかんと倦怠感けんたいかんとかです。まあ、軽い風邪のような症状です」

「風邪……」

「はい。ですから、安心してください」

佐藤が静かに笑った。

3

お風呂上がりには体重計に乗った私は、改めて現実を突き付けられた。

平均体重から、十キロ以上オーバーしている。

——どうすればあそこまで太れんのかね？

——食べ過ぎでしょ。

ミカとエリの言葉が脳裏よきを過る。

別に食べ過ぎてなんかいいない。食事を抜くことだってある。それでも、太ってしまうのだから、どうしようもないのだ。

——今のままで可愛いよ。

京子の言葉が、地味に一番堪える。

十キロオーバーのままで、いいわけはない。京子だって私と同じ

体型になったら、血眼ちまなこになってダイエットするはずだ。

鏡と向き合おうと、さらに気分は暗くなった。

サプリを飲んで、すぐに自分の容姿が変わるとは思っていない。

でも、それでも、すが縫ぬいにはいられない。

私はサプリを舌の上に乗せると、洗面台に置いてあるうがい用の

コップに水を注ぎ、一気に飲み干した。

当然なのだけど、何の味もしなかった。

ただ、カプセルが喉を落ちていく感触があったけれど、それもすぐになくなった。

部屋に戻って、特にやることもないので、MMORPGにログインして、同じギルドのHINATAと、素材集めに行った。

ゲームの中の私は、現実とは違って、細身で美しいエルフだ。

自分とは違う容姿になれるのが、ゲームのいいところだし、ギルドのメンバーも、私のリアルの姿を気にしない。

アバターを見て、可愛い、綺麗だと言ってくれる。

ただの現実逃避だけど、それでも、こうでもしないと、心が壊れてしまう。

日付が変わったあたりから、何だか、少し身体が重だるい感じが出てきたので、ゲームからログアウトした。

きっと副作用だろう。

確かに風邪のときの症状によく似ている。

もう寝た方が良さそうだ。

私は、ベッドに横になり、まぶた 瞼を閉じた。

眠気はあるのだが、どういうわけか、なかなか眠りに落ちることができなかった。

発汗が凄くて、身体が汗でベタベタになっている。

着替えようかとも思ったのだが、思うように身体が動かない。

それだけではなく、顔の皮膚が痒かゆくなった。

ニキビがあるからダメだと分かっているのに、あまりの痒さに耐えられず、何度も皮膚に爪を立てた。

ポロポロの皮膚が削れる感触があった。

出血しているかもしれない。

起きて確認したいのに、やはり身体が動かない。熱い。

身体が熱い。

汗が止まらない――。

.....

.....

.....

眠っているときは、あれほど苦しかったのに、朝、目を覚ました

ときは、倦怠感もなく、むしろ、すっきりした気分だった。

目を擦りながら洗面所に向かう。

毎朝、洗面所で鏡を見るのが、私にとって何よりの苦痛だ。自分が醜いのだという現実を突き付けられるのだ。

——あれ？

いつもなら、ため息が漏れるのだが、今日は少し違った。

ニキビの数が減っているような気がする。

顔を鏡に近づけ、頬を引き延ばすようにして確認してみる。

夜中に、あれだけ引っ掻いたのだから、出血があるかと思っていたのだが、むしろいつもより肌の調子がいいように見える。

——サプリの効果？

まさか、そんなはずはない。たった一日で、急激に変わるのだとしたら苦勞はしない。

でも——。

私は、近くにある体重計に乗ってみた。

昨日より、一キロ減っている。

「嘘」

思わず声が漏れた。

あのサプリは、そんなに効果があるの？ でも、過度な期待は禁物だ。昨晚は、たくさん汗をかいたし、一キロくらいの誤差は起るものだ。

この日も、夜にサプリを飲んでから寝たー。

同じように、身体が重くなり、汗をかいて寝苦しい夜を過ごすことになったのだが、目覚めはすつきりしていた。

洗面所で鏡を覗き込むと、前の日よりもさらにニキビが減っているような気がする。

頬を触ってみても、脂っぽい感じがあまりしない。

体重計に乗ってみると、昨日より一キロ減っていた。トータルで二キロ減量したことになる。

自分の足に目を向ける。

今まで、太い棒のような足だったのに、ふくらはぎから足首にかけて、細くなったような気がする。

真っ直ぐ立つと、太ももがくっついてしまっていたのだが、今は、ほんの少しだけ隙間ができています。

まだ、サプリの効果かどうかは判然としないけれど、ニキビの量が減り、二キロ痩せたと言う事は、私の心を躍らせた。

これまで、そんなことは無かったのに、何度も鏡を見て、ニヤニヤしてしまった。

重い瞼や団子のような鼻は相変わらずだけど、それでも少しだけ自信がついた気がする。

登校する足取りも軽かった。相変わらず、ミカやエリの陰口は耳

に入ったけれど、心持ちが違うせいか、少しも気にならなかった。
三日目になると、頬を覆い尽くしていたニキビの量が、目に見えて減っていた。

まだ残っているけれど、ポツポツと点在する程度の量だ。
体重も、前日から二キロ減った。これで、合計四キロ痩せたことになる。

胴回りも足も、明らかに昨日より細くなっている。まだ、標準にはほど遠いけれど、それでも今までの自分とは違う何かになれた気がした。

四日目、京子が最初に私の変化に気付いた。

「ねえ。美麗ちゃんちよっと痩せた？」

痩せた——これまで、一度だって言われたことのない言葉。こんなにも、心地いいものだとは思わなかった。

「うん。最近、ダイエットして……」

そう応えた声が、自分でも浮かれていると分かった。

「そうなんだ。凄い。何か、肌も綺麗になってる。どんなダイエットしてるの？」

嬉しさのあまり、危うくサプリのことを口にしかけたけれど、慌ててそれを引つ込め、「食事制限と運動」と嘘を吐いた。

本当のことを言って、京子が同じサプリで痩せたり、肌が綺麗に

なったりするのは嫌だ。

「そうなんだ。全然、違う人みたい」

「そうかな？」

「でも、あんまり無理しないでね。急激に体重落としたりすると、身体壊しちゃうから」

私のことを心配する言葉に聞こえるが、本心は違うはずだ。

これまで、自分を引き立たせるための比較対象にしていた私が、痩せることが気に入らないのだ。

結局、京子はそういう女なのだ。

五日目にもなると、ミカやエリはもちろん、クラスの他の生徒たちも私の変化に気付き始めた。

ミカとエリは、「デブがちよつと痩せても、デブだから」と辛辣しんらつな言葉を投げつけてきたけれど、それよりも、痩せたことを賞賛する声の方が多かった。

「ねえ、ねえ、どんなダイエットしてるの？」

「運動と食事制限」

「ダイエットすると、肌も綺麗になるの？」

「食事制限したのが影響しているのかも」

「ええ。私も食事制限しよっかな」

これまで、誰からも話しかけられなかったのに、こんな風に自分

の周りに人ばかりができるのが、堪たまらなく嬉しかった。

帰宅すると、ママからも痩せたことを指摘されて、少し困った。

一緒に生活しているママは、私が運動していないことも、食事制限をしていないことも知っている。クラスメイトと同じ理由は通用しない。

詳しいことは言わず、ダイエットサプリを飲んでいただけ答えた。

「そのサプリ大丈夫なの？ 悪い成分が入っているやつも、あるっていうじゃない？」

心配性のママは眉を顰ひそめる。

「平気だよ」

私は、逃げるように自分の部屋に戻った。

机の抽斗したまごの奥に仕舞ってあった手鏡を取り出し、そこに映る自分の顔を見つめる。

改めて見ると、顎のラインもすつきりしてきたし、ニキビがなくなって、格段に肌が綺麗になった。

——あれ？

これまで、重かった一重の瞼が、うっすら二重になっている。

もしかしたら、これも体重が減ったことが影響しているのかもしれない。

カサカサだった薄い唇も、瑞々しく感じる。

——私、痩せたら、全然ブスじゃないかも。

翌日、学校に行くと、京子が心配そうな顔で駆け寄って来た。

「美麗ちゃん。本当に大丈夫？」

「何が？」

「急激に痩せ過ぎな気がする。無理し過ぎると、身体に悪いよ」

あたかも、心配しているように振る舞っているが、それは本心ではないはずだ。

「別に無理してないよ。全然、平気だから」

「あのさ。もしかして、変な薬とか使ってない？」

「何のこと？」

「最近、ダイエットサプリと称して、ヤバイ薬を売りつける人がいるって、ネットの記事を見たから……」

「そんなわけないでしょ！」

思わず大きな声が出た。

「いや、でも、やっぱり最近、美麗ちゃんおかしいよ」

今なら、京子より私の方が痩せている。引き立て役だと思っていた私が、細くなったことに焦りを覚えているのだ。

だから、京子は心配するふりをして、難癖を付けている。

「は？ おかしいのはそっちでしょ？ 他人のことを気にしている

暇があったら、自分も少し痩せたら？」

私は、京子に背中を向けてその場を立ち去った。

京子は、後ろめたさがあるのか、それ以降、私に話しかけてくることはなかった。

でも、寂しさはなかった。

これまで、話したことのないクラスメイトたちと、ダイエットについての話をいっぱいした。

帰宅すると、感じたことのない疲労感を覚えた。

薬の副作用である倦怠感とは違う。もっと、重くて、脳が痺れるしびような奇妙な感覚だった。

ただ、それが心地いいとすら感じた。

次の日、土曜日ということもあり、ママにお小遣いを貰って美容院に行くことにした。

今まで髪は、自分の顔を隠すための道具の一つだったけれど、もう、そんなことをする必要はない。自分の好きな髪型にしてみよう。

こんな気持ちで、美容院に向かうのは、初めてのことだった。舞踏会に向かうシンデレラの気分だ。

美容院で、髪を整えてもらったときに、髪質がいいと褒められた。自分で触ってみると、以前とは手触りが違っているように感じられた。

鏡に映る自分の姿を見て、驚きのあまり声が出なかった。

——これが私？

髪型を変えただけなのに、顔をすげ替えたかのような衝撃しょうげきがあった。

「美麗ちゃん。どうしたの？」

帰宅すると、ママが私以上に驚きの声を上げた。

「どう？」

笑顔で、くるっと一回転すると、ママの顔はみるみる笑顔になった。

「凄く可愛くなってるわよ」

「でしょ」

「でも……急にそんな……」

「サプリのお陰だよ。体重減っただけじゃなくて、ニキビもなくなっただけ」

本当は、もっと自慢したかったけれど、変な疑いをかけられそうだったので、会話もそこそこに自分の部屋に入った。

4

これまでの私は、月曜日になると憂鬱な気分支配されていた。

学校に行き、俯いて過ごすのかと思うと、それだけで気分が滅入ったし、ミカやエリの陰口を想像するだけで、死にたい気分になった。

だけど、今日は違った。

早く、今の自分を他の誰かに見て欲しいという高揚感で満たされていた。

鏡の前に立ち、ママの化粧水とクリームを塗ってみた。肌の艶が増した気がする。ファンデーションとコンシーラーも付けてみる。

一気に顔が明るくなった。

それから、コンビニで買った色付きのリップも。

「ああ……」

思わず声が漏れた。

体重は、もう標準値になっているし、これなら大丈夫だと、制服のスカートを折って、膝上丈にした。

たったそれだけなのに、何かとてもいけないことをしている気分になった。

登校すると、私の変貌へんぼうぶりに教室がざわついた。

「太田って、あんなに可愛かったっけ？」

耳に入ってきた男子の声に、舞い上がりそうになったけれど、平静を装う。

可愛いと言われることが、当たり前みたいに、澄ました顔で席に着いた。

「何あれ？」

「マジでウザいんだけど」

ミカとエリが、聞こえよがしに言っていたが、全く気にならなかった。

だって、二人の声から滲み出てくるのは、これまでのような蔑みではなく、羨望せんぼうだったから。

京子が、ちらっと美麗の方に視線を向けてきたが、先週のことがあるからか、声をかけてくることはなかった。

今までとは違って、休み時間の度に、男子生徒から声をかけられた。中には、連絡先を聞いてくる男子もいた。

掌返しをするクラスメイトたちを、嫌だとは思わなかった。

——綺麗になるって本当に素晴らしい。

心の底からそう思った。

楽しい気分を抱えたまま、帰宅しようとしたところで、京子に声をかけられた。

「何？」

ついつい声に棘とげが混じる。

「本当に大丈夫なの？」

「何が？」

「やっぱり少し痩せすぎだと思う。無理なこととかしてない？」

——またその話か。

「平気だって言ってるじゃん」

「でも心配だから」

「嘘。そうやって、友だち面して、本当はずっと私のこと引き立て役にしてたんでしょ」

「違うよ。友だちだから……」

「よく言うわ。もう、私は、あなたの引き立て役じゃないから」

私は、それだけ言うと、京子の前から立ち去った。

せっかく、楽しい一日だったのに、京子のせいで全部が台無しだ。

廊下を歩いている間も、苛々いらいらが治まらなかった。

昇降口で靴を履き替えているときに、誰かが私の前に立った。武英君だった。

「あ、武英君。今、帰り？」

これまでなら、ろくに話もできなかったのに、自然に言葉が出た。

きつと、自分に自信が持てたからだろう。今の容姿なら、武英君に話しかけても、全然変じやない。

「これ、落としたけど」

武英君が、折り畳んだハンカチを、私の方に差し出して来た。

「え？」

薄い青色のハンカチだった。

——私のじゃない。

そう言おうとしたのだけれど、武英君は、私にハンカチを押しつける。そして、「病院に行った方がいい」とだけ言い残して、そのまま立ち去って行ってしまった。

——どうということだろうか？

武英君は、少し風変わりだけど、このハンカチはいったい何の意味があるのだろうか？

手に持った感じからして、折り畳まれた中に、何かが入っている。

——もしかして？

武英君が、不器用なかたちでプレゼントを渡してくれたのだとしたら？ そんな期待が生まれてしまった。

触ってみた感じからして、中には小さくて硬い何かが入っている。

折り畳まれた紙のような気もする。

もしかして、電話番号とかが書かれた紙かもしれない。中を確かめたいけれど、他の誰かに見つかるのは恥ずかしい。

私は、大切にハンカチを持って、足早に帰宅した。

部屋に入って、机の上にハンカチを置くと、大きく深呼吸をしてから、ゆつくりとハンカチを開く。

中に入っていたのは、赤いネイルチップだった。

「何これ？」

期待をしていた分、落胆らくたんしてしまう。

私は、ネイルチップは付けていない。武英君が、これを私のものだ勘違いして、渡してきたのだろう。

でも――。

考えようによっては、これはチャンスだ。

明日、武英君に間違えていることを伝えよう。それをきっかけに、色々とお話ができるかもしれない。

そう考えると、このネイルチップの持ち主に感謝だ。

私は、ネイルチップを摘まんで、じっと見つめた。

――ん？

何かがおかしい。

赤いネイルチップだと思っていたけれど、よくよく見ると、そうではない。

これは――。

人間の爪だ。

赤かったのは、血が付着していたからだ。

それに気付くのと同時に、私は爪を放り投げ、椅子を引いて机から離れた。

恐怖で身体が縮こまる思いだった。

こんな気味の悪いものを渡してくるなんて、武英君は、イケメン
だけど、ヤバイ人なのかもしれない。

ふと、武英君が、ハンカチを渡すときに言っていた言葉が脳裏を
過る。

——病院に行った方がいい。

あれは、いったいどういう意味だったのだろうか？ なぜ、私に病
院を勧めたのか？ 今になって、あの言葉が、途轍とてつもなく恐ろしい
ものだったように思える。

私は、おそろおそろ、自分の右手に目を向けた。

「な、何で……」

人差し指の爪が、なくなっていた。

今は凝固こじりかたしているけれど、出血の痕があった。

——この爪は、私の爪なの？

爪は、こんなに簡単に剥はがれるものなの？ 爪が剥がれているの
に、痛みを感じなかったの？

いや、痛みどころか、気付くことさえなかったのはどうして？

あまりのことに、呼吸が荒くなる。

私は、左手の人差し指の爪に触れてみた。

わずかな力だったはずなのに、ずるっと爪が剥がれ落ちた。

だらだらと流れ落ちる血を見つめながら、私は堪らずに悲鳴を上げた。

5

翌日、両手の指に包帯を巻いて学校に行った――。

休むという選択もあったのだが、せっかく、周囲の環境が変わり始めたのに、ここで家に引きこもったりしたら、また元通りになる気がした。それに、一人で家にいるのが恐ろしかった。

誰かと一緒にいないと、気が狂いそうだ。

ママには、爪が剥がれたことは言っていない。もし言えば、余計な心配を与えることになるし、サプリのことも詳しく言わなければならなくなる。

今は、ただ爪が剥がれただけだ――と自分に言い聞かせた。

「手、どうしたの？」

クラスメイトたちに訊ねられたので「火傷やけどしちゃった」と、適当な嘘を吐いた。

ふと、自分に向けられた視線を感じた。

武英君だった。

彼だけは、私の爪が剥がれたことを知っている。

何か言われるのではないかと、気が気ではなかったけれど、一瞬目が合っただけで、すぐに興味を失ったのか、顔を背けてしまった。そうだ。ハンカチを返し忘れた——などと考えているうちに、授業が始まった。

包帯を巻いた自分の手を、何度も見返す。

そんなことをしても、何も変わらないのだけれど、それでも、そうせずにはいられなかった。

爪は、なぜ剥がれたのか？ やっぱり薬の副作用なのだろうか？

でも、佐藤はそんなことは一言も言っていなかった。

「太田さん」

私の思考を遮るように、教師に名前を呼ばれた。

「は、はい」

「８ページ目を読んでください」

「はい」

私は、すぐに教科書を持って立ち上がる。

立ち眩たくらみがした。

倒れそうになり、慌てて机に手を置いた。

その途端、ボタボタつと何かが机の上に垂れた。

——え？ 何？

見ると、机の上が大量の血で濡れていた。

「鼻血とかウケる」

ミカが冷やかすように言った。

——鼻血？

鼻の下に手を当てると、包帯がみるみる赤く染まった。

息が苦しい。

何がどうなったか分からないけれど、鼻から大量の血が溢れ出し
ている。

ぶつけたわけでもないのに、どうして急に鼻血が？

「太田さん。とにかく一旦座って」

教師に言われて、私は椅子に座り直し、鼻血が溢れないように上
を向く。

——どうして、こんなことになってるの？

みんなの前で鼻血とか、恥ずかしい。早く止まって欲しい。

何とか、鼻血を抑えようと、指で鼻を摘まむと、メリツと何か
剥がれるような嫌な音がした。

「きゃっ!!」

隣の席に座っていた女子生徒が、悲鳴を上げながら私から離れた。

——え？何？

ポタツと音がして、机の上に何かが落ちた。

それは、鼻だった。

私の鼻――。

顔から鼻がもげてしまった。

――嘘でしょ。何で？

「ちよつと。ヤバいんじゃない？」

「てか何あれ？」

ミカとエリの声が、私の鼓膜を引っ掻く。

二人だけではない。クラスのみんなが、口々に何かを言い始める。何を言っているのかは、分からないけれど、とにかく不快だった。声が響く度に、頭が締め付けられるように痛くなる。

「うるさい！」

私は、叫びながら髪を掻き回した。

たったそれだけなのに、ブチブチともの凄いな音がして、髪の毛がごっそりと抜け落ちた。

いや、抜けたのは髪だけではない。

頭皮も剥がれ、びちゃびちゃと鈍い音を立てながら、床を赤黒く塗らした。

教室に悲鳴が響く。

「ちよつと！ 何かヤバい病気なんじゃない！ 伝染するから、早く出て行ってよ！」

ミカが立ち上がり声を上げた。

この女は、いつも、いつも——私が何をしたというの？

こんな状態になっているというのに、心配ではなく、いんねん因縁を付けるなんて、どうかしている。

そもそも、私がこんなことになっているのは、全部、この女がいけないんだ。

私は、気付いたときには、ミカの許に歩み寄っていた。

「ちよっと。近付かないでって言ってるでしょ！」

「うるさい！」

私は、ミカの言葉を掻き消すように叫んだ。

これまで溜め込んでいた黒くて、どろどろとした感情が、強い殺意となって私の身体の中を駆け巡った。

抑えが利かず、おほ気付いたときにはミカの首を掴んでいた。

このまま、首を絞めて殺してやりたい——本気で、そう思った。

目の前が急激に暗くなり、その後、何が起きたのかはよく覚えていない。ただ、気付くと教室はせいじやく静寂に包まれていた。

皆、私に視線を向けたまま、時間が止まったかのように固まっている。

「え？」

我に返った私は、右手に何かを掴んでいることに気付いた。

それは——。

ミカの頭部だった。

すぐ足許あしもとに、首を引きちぎられたミカの身体が転がっている。床にも、天井にも、血が飛び散っていた。

——な、何これ？

これを私がやったの？ そんなはずない。人間の頭を引き千切るなんて、できるはずがない。

——そうだ。これは夢だ。

そう思おうとしたけれど、教室の中に充満する血の匂いが、これは現実だと告げていた。教師やクラスメイトたちの顔は、恐怖にこののいていた。そんな目で、私を見ないで——。

私は、ミカの頭部を投げ捨てると、教室を飛び出した。

何処どこに向かっているのか、自分でもよく分からなかった。ただ、

この場所から逃げ出したいという一心で走った。

………

………

………

遠くで、サイレンが鳴り響く音がした。

救急車と警察車両の異なる音が入り交じり、鼓膜が破れそうなく

らいに五月蠅うるさかった。

私は、学校の近くにある公園の公衆トイレの便座に座り、途方に

暮れていた。京子とよく、一緒に来た公園だ。

これから、どうすればいいのか分からなかった。

爪が剥がれ、鼻が挽^もげてしまった。もう、痩せるとか、そういう次元ではない。

問題は、それだけじゃない。

私は人を――ミカを殺してしまったのだ。

首を引き千切るといふ、とんでもない方法で。

あんなこと、普通の人間にはできない。きっと、私はもう人ではなくなってしまったのだ。

鼻が挽げ、大量に出血しているのに、痛みすら感じないのが、その証拠だ。

何とかしなくては――と思うのだけれど、何も方法が思い付かない。ずっとここにいれば、すぐに警察に見つかってしまう。

逃げなきゃ――でも、何処に？

家には、もう警察が向かっているに違いない。そもそも、こんな酷い顔を、ママに見せるなんてできない。

溢れ出した涙を拭っていると、個室のドアがコンコンとノックされた。

――もう警察が来たのか？

私は、立ち上がって後退^{あとずさ}ったけれど、狭い個室の中に、逃げ道な

どない。

「美麗ちゃん。いるんでしょ」

聞こえてきたのは、京子の声だった。

——どうして？

聞き返そうとしたけれど、慌てて口を両手で押さえた。ここで答えたら、自分の居場所を教えることになる。

「大丈夫だから。私の他に、誰もいないから。お願い。ここを開けて」

京子が、そう続ける。

——一人で来たの？

「なぜ？」

思わず声が出ってしまった。

すると、ドア越しに京子が安堵あんどの息を漏らした。

「良かった。やっぱり美麗ちゃんだ」

「京子……」

「ここを開けて。私にできることなら、何でもするから。私は、美麗ちゃんを助きたいの」

「助ける？ 何で？」

「何だって……友だちでしょ」

——友だち。

その言葉が、私の胸の深いところに突き刺さった。

「ち、違うよ。だって、私は、鼻も取れて、血塗れで、だから……」
「外見が変わっても、友だちは友だちでしょ」

——そうだった。

京子は、どんなときだって、私と友だちでいてくれた。それなのに、私は、自分の容姿のことばかり気にして、京子を遠ざけてしまった。

ずっと、京子は私のことを心配してくれていたのに……。

私も、京子に会いたい。

その衝動に駆られて、私は個室のドアを開けた。

鼻が無くて、頭皮が剥がれた、化け物のような私を、京子は笑顔で抱き締めてくれた。

温かかった。

本当に、温かかった。

私は、泣きじゃくりながら、サプリのことも含めて、自分に何があったのかを京子に全部話した。

京子は、私の言葉を「うんうん」と優しく頷きながら聞いてくれた。最初に、京子に「大丈夫？」と聞かれたときに、本当のことを話していたら、こんなことにならなかったのかもしれない。

痩せたことで、有頂天うちょうてんになって、本当に大切なものを見失って

いた。

京子は、私に起きた異変は、そのサプリーにあるのでは、と指摘した。混乱していて、思い至らなかつたけれど、冷静になればその通りだと思う。

京子は、一緒に病院に行ってくれると言った。

そうすれば、ボロボロになった顔を治せるかもしれないし、ミカのこと、サプリーのせいだと証明できる。

話し終え、この先、どうすべきか分かったことで安心したのか、私は力が抜け、トイレの床に座り込んでしまった。

必死に繋ぎ止めようとしたけれど、意識がどんどん遠のいていく――。

目の前が、ブラックアウトした。

でも、それはほんの一瞬のことで、私はすぐに目を覚ました。

さっきまで目の前にいた、京子の姿が見えなくなっていた。

――あれ？ 京子？

私は、京子を探して立ち上がったのだけど、ずるっと床が滑って転倒してしまった。

床が濡れていた。

誰かが水を撒いたのだろうか？ いや、そうではない。

床を塗らしていたのは、おびただ夥しい量の血だった。

「な、何？ 何なの？」

周囲を見回した私の目に、とんでもないものが飛び込んできた。

京子が、床に倒れていた。

目を見開き、苦悶くもんの表情を浮かべている京子は、手足を引き千切られ、首があらぬ方向に曲がっていた。

ひと目見て、死んでいると分かった。

——これも私がやったの？

「いやあー！」

私は必死に叫び声を上げた。

だけど、そんなことをしても、現実は何一つ変わらなかった。

6

私は、呆然自失ぼうぜんじしつのままトイレの床に座っていた。

血に染まった両手に目を向ける。

何だか、指の何本かが不自然な方向に曲がっている上に、黒ずんでいるようにも見えた。スカートから出ている足も、黒く変色している部分があった。

でも、痛みはなかった。

自分の身体からだではなくなってしまうたかのようだ。

「ここにいましたか」

声とともに、誰かがトイレの出入り口に立った。

逆光で影になっていて、よく見えない。

そこにいるのが、誰であったにせよ、この惨状を見たら、悲鳴を上げて逃げ出すに違いない。

きっと警察を呼ぶだろう。

別に、もうどうでも良かった。この先、私がどうなろうと、何もかもが、どうでも良かった。

「これは、酷い有様ですね……」

場違いなほど、呑気な声のんきが聞こえてきた。

「え？」

入り口に立っていた人物が、ゆっくりトイレの中に入って来た。

影になっていた顔が見える。

佐藤だった――。

その途端、私の中で強烈な怒りがこみ上げる。

「あんたのせいだ！ あんたのせいで、京子が死んだ！ 京子を返

せ！ 私の顔を返せ！」

私は、叫びながら佐藤に掴みかかる。

「落ち着いてください。あなたを、治す方法があります。でも、私を殺したら、永久にそのままですよ」

「ほ、本当なの？」

「ええ。本当ですよ」

「きよ、京子は？」

「京子って誰です？ ああ、床の上でバラバラになっている人ですか。死んでしまったものは、もう無理ですよ」

佐藤がおどけた調子で言った。

どうして、この男は、こんなにもふざけていられるのだ。怒りがこみ上げるのと同時に、自分が元に戻れるということに、喜びも覚えていた。

酷い人間だと自分でも思う。友だちが死んだというのに、この期に及んで、自分のことばかり考えている。

だけど——。

「お願いします。治せるなら、治してください」

私が佐藤に懇願すると、彼はにっと口角を吊り上げて笑った。

「ここでは無理です。移動しましょう」

佐藤に促され、公衆トイレを出た。近くの路上には、高級外車が停めてあって、それに乗るように言われた。

私は、素直に車の後部座席に乗り込む。佐藤が運転席に乗り、車が走り出した。

「いったい、私に何のサブリを使ったんですか？」

私は、ルームミラー越しに佐藤を睨み付けながら言った。

爪や鼻、頭皮が剥がれるなんて、普通じゃない。危険は無いと言っていたのに、こんなことになるなんて、どう考えてもおかしい。

「ああ。サプリの中身は、ただの小麦粉ですよ」

「は？」

「小麦粉ですって。知ってるでしょ？」

「し、知ってますけど、小麦粉で、こんなことになるはずないじゃないですか！」

怒りをぶつけたけれど、佐藤は緩い笑みを崩そうとはしなかった。

「ですから、あなたの身体に起きた変化は、サプリとは全然、関係ないんですよ」

「で、でも……」

「あ、言い方を変えた方がいいですね。あの日、採血するのと同時に、麻酔ますいを打たせてもらいました」

「麻酔……」

言われてみれば、採血のあと、急に眠くなり、しばらく眠ってしまった。

「普通、あんな場所で採血するなんていったら、疑ったりするんですけど、あなたは何の不審も抱かなかった。子どもだから、まだ知識が無かったんですね。だから、凄くやり易かったですよ」

佐藤が嬉しそうに目を細めた。

今になってみると、確におかしいところは多々あった。だけど、無料でダイエットサプリが入ると、不自然な点から目を逸^そらしてしまっただけ。

「わ、私が眠っている間に、何をしたんですか？」

恐怖を覚えながらも訊ねる。

「そうですね。一つは小型のチップを埋め込んでおきました。だから、さっきも居場所が正確に分かったんです」

「チ、チップ」

私が慌てて身体を検めていると、佐藤が笑った。

「探しても見つかりませんよ。身体の奥の方に仕込んでありますから」

「どうして、そんなことを……」

「チップはモニタリングのために仕込んだものです。本当にあなたの身体に入れたかったのは、別のものです」

「別のもの？」

「ええ。機械を仕込んだんですよ」

「？」

「機械と言っても、細菌やウイルスのように、目に見えないほど小さい機械です。ナノマシンという奴です」

何となく、耳にしたことがある。

だけど、それはアニメや映画の話であって、現実には、そんなものがあるとは、到底思えない。

「嘘ですよね？」

「本当です」

そう答えた佐藤の顔は、急に真顔になった。

「ナノマシンの開発は、あなたが思っている以上に、進んでいるんです。日本では、開発が遅れていますが、諸外国では、難病の治療などに役立てようという動きが盛んです」

「それを、私の身体に？」

「はい。人間の身体を内部から作り替えるようにプログラムしたナノマシンを、あなたの体内に送り込んだんです」

「……………」

「ナノマシンは、あなたの細胞を取り込みながら、自己増殖し、遺伝子情報を書き換え、脂肪を溶解ようかいさせて、あなたを痩せさせることに成功した」

「……………」

「でも、顔の造形を作り替える段階で、バグが発生してしまったようです。そのせいで、あなたの顔は崩れることになった」

話を聞いているだけで、頭がくらくらしてきた。

佐藤の語る話は、まるで現実味がない。妖怪や幽霊の仕業だと言われた方が、まだ納得できる。

いや、今は信じるとか、信じないの話ではない。

「どうやって治すんですか？」

「さつきも言いましたが、あなたの身体の中に入っているのは、ナノマシンです。特定の電極を流してやれば、死滅しめつするようにできています」

「で、電気……」

「そんなに怖がらなくても大丈夫です。人間には害のない程度の、極少量の電流ですから。あっ、そうか。もしかしたら、電磁波が影響したのかもしれないね。スマートフォンとか、電子レンジとか、そういったものが、ナノマシンの機能を誤作動させたのかも……」

佐藤は何が楽しいのか、ニヤニヤしながら喋り続けている。

安全だと言ったのに、ナノマシンなどという、よく分からないものが、身体の中に入れられていたかと思うと、再び恐怖がこみ上げてくる。

「あ、到着しました」

佐藤は、そう言って車を停車させた。

前に足を運んだ、白い箱のような建物の前だった。

「さあ、降りてください」

運転席から降りた佐藤が、私に声をかけてくる。

治すとか言って、佐藤はまた私を騙すつもりなのかもしれない。

だけど、こんな崩れた顔のままでは、何もできない。おまけに、人を二人も殺してしまったのだ。他の選択肢はなかった。

私は、黙って車を降りた。

足許がふらついて、その場にくすお頽れそうになったけれど、何とか踏ん張った。

「こっちです」

佐藤に案内されて、この前来たのと同じ部屋に通された。

改めて見ると、その異様さに気付かされる。この部屋は、診察室というより、研究室という表現の方が合う。

「どうぞ。座ってください」

佐藤が、リクライニングチェアを指し示したけれど、素直に座る気にはなれなかった。

この椅子に座ったのが、全ての始まり。

いや、もっと前――。

スマホで広告をクリックしたのがいけなかった。違う。きっと、何の努力もせずに、痩せようとしたのが、そもその間違いだった。

「どうしたんですか？ 座らないんですか？」

「す、座ります」

私は、そう答えるしかなかった。

どんなに後悔しても、全てが手遅れだ。せめて、元の身体に戻りたいと思う。

私が椅子に座ると、佐藤がリクライニングチェアの周辺にある機械のチェックを始めた。

「あ、そうだ。言い忘れていました」

佐藤は、作業をしながら思い出したように言う。

「え？」

「身体を治すことはできます。でも、見たところ、手足はダメなようです。壊死えししてしまっている部分が、結構あります。そうか、無理な力を出したことで、肉体が耐えられなかったんですね」

「……………」

「でも、安心してください。別の手足を付ければ済む話ですから」

「別のって……」

そんなロボットみたいに、手足をすげ替えるなんて、できるはずがない。

「大丈夫ですよ。あと、顔も鼻が壊死してますから、そのまま無理ですね。まあ、でも、どのみち、あなたには関係ありませんね」

「関係ないって、どういうことですか？」

訊ねる私を遮るように、佐藤が注射器を首筋あてに宛がった。

痛みはなかった。

ただ、強烈な眠気に襲われ、私は意識を失った。

……

……

……

目を覚ますと、視界がゆらゆらと揺れていた。

音も聞こえない。

まるで、水の中に潜もぐっているような感覚だった。

身体を動かそうとしたけれど、うんともすんとも言わなかった。

———どうということ？

混乱している私の顔を、佐藤が覗き込んできた。その顔はぐにやりと歪ゆがんでいた。

佐藤が、何かを言ったのだけど、何と言っているのかは聞こえなかった。

———ねえ！ どうして身体が動かないの！

そう問いかけようとしたのだが、口もまったく動かなかった。

佐藤は、私を見てニコツと嬉しそうに笑うと、鏡を取り出し、私に見えるように翳かざした。

そこに映っていたのは———。

水に満たされた円筒型の瓶だった。

そして、その中には、たくさんのケーブルに繋がれた剥き出しの脳と眼球が入っていた。

——これが私？

悲鳴を上げようにも、口が無いのだから、それすらできない。

こんな姿になりたかつたんじゃない。

私は、ただ綺麗になりたかつただけなのに——。

(終)